

昔話にみる水のイメージ

千野 美和子

昔話に登場する水について、グリムメルヘンと日本昔話から、物語に表現された水を取り出し、物語の展開の中で、どのようなイメージとして語られているかを考察する。まず、グリムメルヘンに現れた水の表現を取り上げる。その表現を、死につながる水、異界としての水・異界の通路としての水、2つの世界を分かつ水や障害物としての水、不思議な力をもつ水、何かが起きる場としての水、その他の6つに分けて、そのイメージについて検討する。次に、日本昔話に現れた水の表現についても、同様に分けて検討し、グリムメルヘンと比較しながら、水のイメージについて検討する。昔話に現れた水は、当時の人が抱いた水のイメージであるとともに、意識から見た水のイメージが表現されていると思われる。

キーワード：水のイメージ、グリムメルヘン、日本昔話

1. はじめに

心理療法において、夢や、箱庭、語られる話のテーマに、水のイメージが現れることがある。面接の経過の中で、その水のイメージと関わることによって、生き生きとした本来の自分を取り戻していく様子がかがわれる。その意味で、水の持つ治療的イメージに注目している。以前、いくつかの文献から、水のイメージを取り上げ、治療的イメージについて検討した（千野，2006）。ここでは、昔話に現れた水を取り上げ、その水のイメージについて検討する。

まず、グリムメルヘンの中から水の表現を取り上げ、その特徴について述べる。次に、日本の昔話の中から水の表現を取り上げ、グリムメルヘンの特徴と比較し、昔話における水のイメージについて考察する。

2. グリムメルヘンにみる水

対象としたのは、高橋健二訳『グリム童話全集ⅠⅡⅢ』（小学館，1976）である。

2.1 死とつながる水

グリムメルヘンの物語に現れる水は、様々なイメージをもつが、まず、死につながるイメージとしての水を取り上げたい。

物語の展開として、また、結末として、川や井戸にはまり、溺れて死ぬというものがある。『おおかみと7匹の子やぎ』や『赤ずきん』の結末として、狼が井戸端に行って水を飲もうとして溺れ死ぬ、狼が大きな水ためにはまりこんで溺れて死んでしまう。また、『歌う骨』の展開の場面で、

兄は弟が獲物をとってきたのを妬み、川の真ん中で後ろから殴りつけ、弟は川に落ちて死ぬ。その後の結末として、悪い兄は袋の中に入れて生きてそのまま水に沈められておぼれ死にする。『くまの皮男』では、父の難儀を救ってくれた男の花嫁になることを上2人の娘は拒否したが、末娘は承諾する。その結末として、姉の2人は、怒って駆け出していき、1人は井戸で溺れ死ぬ。『怪鳥グライフ』では、王は、主人公のハンスに姫を与えようとせず、幾つもの課題を出す。最後に王は川の真ん中に下ろされて、溺れて死ぬ。

溺れて死ぬという表現までいかず、溺れるという表現で死を表しているものがある。『めっけどり』では、最後に主人公を殺そうとしたおばあさんが、池の水を飲み干してしまおうとしたとき、鴨が素早く泳いできておばあさんを水の中に引っ張り込み、悪いおばあさんは溺れてしまう。『7人のシュワーベン男子』では、冒険を求めて7人組は川に来る。深い静かな川で架かっている橋が少なく、あちこちで舟で渡してもらわなければならない。どうしたら渡れるかを聞き違い、結末では、川を渡ろうとして、まず1人が川の中に沈み、次に残りの6人が川に飛び込み、溺れてしまう。『しらみと、のみ』の結末では、水の湧き出ている井戸が、恐ろしい勢いで流れ初め、みんな水の中で溺れてしまう。

ここからわかることは、川は、そこに落ちてしまえば、溺れて死んでしまうという死の危険をもつものであるということである。そこから、溺れること、沈むことや川に入ることはそのまま死を意味するものとなる。

『小百姓』では、主人公はだましの罪で死刑の宣告を受けて、穴だらけのたるに入れられて川の中に入ることがされることになる。しかし、うまくだまして、他の男と入れ替わり、他の男がたるの中に入っているとは知らずに、みんなはたるを川の中に入ることがしこむ。主人公は、川の底はきれいな牧場で小羊がたくさんいると再び村のみんなをだまして、川に行き、空の綿雲が水に映っているのを見て、水の底にいる羊がもう見えると叫び、村のみんなが川に飛び込み、村は死に絶えた。この話には、反映の水や、異世界としての水のイメージが存在するが、最後の、みんな川に入って村が死に絶えたという水は、死そのものを表している。

水に入ると溺れて死ぬところから、『三人の幸運児』で、猫はたくさんいるので生まれる猫の子はたいてい水の中に入れて殺される、と水の中に入れることが殺すことになるという話がある。

『森の中の三人のこびと』の展開部分で、主人公が王様と結婚し子どもを産んで幸せになったのを聞くとママ母は城に行き、ベッドに寝ている妃を、流れる川の中に投げ込んだ。この後の展開では、妃は鴨に姿を変えるが、ママ母は殺すことを意図して川に投げ込んだと思われる。同様に、『白いはなよめと、黒いはなよめ』では、王様が御者の妹を花嫁に望み、その花嫁を馬車で連れてくる途中、橋を渡って深い川を越すところで、ママ母とその娘が花嫁を突き飛ばし、花嫁は川のまっただ中に落ちる。ママ母は殺す意図で川に突き飛ばしたが、この話でも、花嫁が沈んだ途端、雪のように白い鴨が1羽水面から出て、川下へ泳いでいき、話が展開する。『三まいの、へびの葉』では、心変わりした妃が、海の航海の最中に、夫を海の中に投げ込み、夫は航海の途中で死んだことにしようとする。しかし、召使いの助けで、夫は生き返り、妻の悪巧みをあばき、妻は穴だらけの舟に乗せられ、海に押し出され、波の中に沈む。『ブレーメンの町の楽隊』では、「うちのおかみさんが僕を水につっこんで、溺れ死にさせようとしたんで逃げたんだ」とわけを尋ねたロバに年寄り猫が答える。『小さいろば』では、妃が子どものないのを嘆いていたら、神様が願いを叶えてくれたが、人間の子ではなく小さいろばだった。母親は悲しみ、ろばなんかなら、子ど

もがないほうがよい、魚に食べられてしまうように、川の中に放り込むよう言う。しかし、王は神様が授けてくれたのだから、跡取りにしようと育てることになる。これらの話では殺すのを意図して水に投げ込まれたり、投げ込まれそうになるが結果的には死なずに助かる話となっている。それは物語の主人公である場合であり、悪者の場合は悪いことをした当然の報いとしての死がある。

さて、亡き者にすることを意図して川に流されるのだが、死に至らず、そこから話が展開する物語がある。『金の毛が、三本あるおに』では、貧しい家に生れた男の子が、いずれ王の姫を花嫁にすると言う予言に腹を立てた王が、両親からその子どもを引き取り、箱に入れて、川にその箱を投げ込んだ。王は姫を救うことができたと考えたが、箱は沈まないで、浮いていき、水車場に引っかかっていたのを、水の中から引き上げ粉屋の夫婦が自分の子どもにした。『金の山の王さま』では、父親と黒いこびとが、息子を取りあい、息子はどちらのものでもなく、川に浮かんでいる小舟に乗って、父親の足で突き放され、あとは川の流れのままに委せることになる。突き放したとき、小舟がひっくり返ったので、父親は息子の死を悲しんだが、小舟は沈まないで流れていき、見知らぬ岸に辿りつく。『三ばの小鳥』では、妃が子どもを産むと、妃の2人の妹は、その子どもを川の中に投げ込もうと相談して、赤ちゃんを川の中に投げ込んだ。川の側に漁師が住んでいて、魚を捕っていると、男の赤ちゃんをすくい上げた。子どもは運良く生きていて漁師夫婦が赤ちゃんを育てた。また、妃が男の子どもを産むと、悪い妹達が川の中に投げ込んだ。その子も漁師夫婦が育てた。また、妃が女の子どもを産むと、悪い妹たちが川の中に投げ込んだが、同じように漁師夫婦が育てて、子ども達は大きくなる。

昔話に現れる川はこのように死に結びつくイメージが強い。それは、昔話を語る当時の人びとにとって、川は人を溺れさせ、人の命を奪う危険な存在であったからであろう。ここでは、死という形で、水のもつ否定的なイメージが強調される。

2.1 異界としての水、異界の通路としての水

『小百姓』で、水の底には小羊がたくさんいるとだまして、村のみんなを川に飛び込ませた。ここにあるのは水の中にはもうひとつの世界があるというイメージである。

まず、水の世界の住人とどう関わるかが表現されている昔話をあげる。

『かえるの王さま、または、鉄のハインリヒ』では、主人公である姫が、水の世界をどのように見ているかが受け取れる。森の中の古い菩提樹の木の下に、井戸があった。姫の金のマリが水の中に落ちた。井戸は深い。姫が泣いていると、蛙が水の中から顔を出して、姫の仲間になると約束するなら、金のマリをとってこようと申し出る。姫は約束をするが、蛙は水の仲間であり人間の仲間になれないと初めから相手にしていない。ところが、蛙は姫のいる城までやって来て、仲間として扱われることを要求する。ここから、物語が展開するのだが、ここでは、姫にはこちらの世界と水の世界は全く別であるという意識がある。

『白いへび』では、若者が、池のそばを通りかかると魚が葦の中にかまっていたので、魚を水の中に戻してやる。若者は、姫の花婿になるために、海の中に投げ込まれた指輪を海の底から拾い上げる課題を与えられる。海辺でどうしたらよいか考えていると、命を助けた魚が泳いできて、指輪の入った貝を若者のそばにおいた。『正直フェレナントと、腹黒フェレナント』では、川のそばを通った主人公は岸に転がっている一匹の魚を川の中に投げ込んで助ける。後に、主人公ががちょうの羽のペンを水中に落としたとき、助けた魚がペンをくわえてきた。『あめふらし』

では、主人公は湖のそばに行き、水の底から水面に出てきた大きな魚に鉄砲でねらいを定めたとこ、恩返しをするから打たないでくれと頼まれる。姫が出した難題を解くために、湖の魚を呼び寄せて、生かした代わりに、どこに隠れたらよいか言うように言った。魚は考え込み、魚の腹の中に閉じ込めるために、彼を飲み込んで湖の底にくぐった。そして、『みつばちの女王』では、主人公は兄が殺そうとする鴨を助ける。城を救うための2つ目の課題は姫の寝室の鍵を海の中から取ってくることである。主人公が海に来ると、前に救ってやった鴨が水の中に潜って、底から鍵をとってくる。『ふたりの旅職人』では、池の上を数羽の子鴨が泳いでくるので1羽を捕まえて首をひねろうとしたら、親鴨が情けを乞うので、捕まえた鴨を水の中に入れてやる。その後、なくした王冠を取り戻すよう王に命令されて、池のそばに行き、鴨に打ち明けると、鴨は、水の中に落ちて底に沈んでいる王冠を拾い上げてくる。このように主人公が助けた魚や鴨が主人公を助けて、水の中に落ちたものを拾い上げたり、水の中に隠れることができる。こちらの世界と水の世界は別であるが、水の世界に住むものと仲よくなり、異界とうまく関わられるようになる。

また、『漁夫と、その妻』では、漁夫が海で釣りをしていると、口をきく大きなカレイを釣る。水の中に返すが、妻に言われて、願い事を叶えてもらう。願い事は果てしなく、カレイは願いを聞いていくが最後は元に戻る。せつかく水の世界との関係をとることができたのに、それを生かせなかった例である。同様な展開から、異なる物語へと発展するメルヘンがある。『金の子ども』では、金の魚を釣るが、魚を水の中に返す代わりに、小屋をりっぱな城にしてもらう。しかし、その理由を妻に言ったために元通りになる。3度目に金の魚を釣ったときに、金の魚の言うように、魚を6切れにして2切れを奥さんに食べさせて、金の子どもを授かる。そこから中心の物語が始まる。金の子どもという特別な子どもが、水の世界との関わりによって生まれたことが語られる。

水の世界との関わり方の別の例である。『六人の家来』では、紅海に落とした指輪を取ってくる課題で、家来の1人が、口に水をつけて、紅海をそっくり飲み干して、指輪を取ってきた。ここでの関わり方は、水の世界の住人を助けるなどして、仲良くなる形ではない。水の世界から水を取り去り、水のないこちらの世界にしてしまうというかなり強引な関わり方である。

次にあげる2つの話は、水の世界の人間にその世界に閉じこめられる。

『水の魔女』では、小さい兄と妹が井戸のそばで遊んでいたら、中に落ちる。その下に水の魔女がいて、つかまえられてしまい、働かされるが、なんとか逃げることができる。

『池の中の水の精』では、粉屋は幸せと引き換えに生まれたばかりの子どもを水の精に渡す約束をしてしまう。粉屋は子どもを水のそばに行かせないようにして育てた。やがて、子どもは漁師となり、結婚をして幸せに暮らしていたが、ある日、狼のあと、池で手を洗おうと水に浸けた途端、水の精が浮かび上がり、若者を抱きしめて引き込む。若者の妻はおばあさんの助けを借りて夫を水から救い出すが、池から大水が出て、2人を引き離し、その後長い放浪の末再会する。

2つの話は、どちらもこちらの世界になんとか戻ることができたが、水の世界に捕まると、その世界に閉じこめられてしまい、戻ることのできない恐怖を現わしている。水の世界は、こちらに生きる人間にとってある意味で死の世界なのである。

異世界との通路としての水の例である。『ホレおばさん』では、まま子の娘が、井戸の側で糸をつむいでいたら糸巻きが井戸の中に落ちた。糸巻きを取ってくるために、井戸の中に飛び込む。そこはホレおばさんの住む世界で、娘はホレおばさんの家で働くことになった。娘が家に帰りたいたいだったので、ホレおばさんが、大きな門のところに連れていき上の世界に返してやった。ホ

レお婆さんの世界は、水の世界ではなく、井戸はホレお婆さんの世界に行く通路である。ちなみに、帰りは別の通路である門から帰っている。

2.3 2つの世界を分かち水や障害物としての水

川や湖、海があちらとこちらを分けるものとして存在する。それによって、2つの世界の断絶が象徴されている。そのために、旅する主人公は、その断絶を渡ることができない障害と受け取る。

『忠実なヨハネス』では、海を渡り長い船旅の末、探し求めていた王女の町に着く。『ヘンゼルとグレーテル』では、魔女の家から出て2、3時間歩くと、大きな川に出会う。橋もなく小舟もないので、白いかもに頼んで、1人ずつ渡してもらい、家に帰る。『王様の、ふたりの子ども』では、大男は王子を捕まえて、大きな湖を横切って大きな城に連れていく。そこで王子は課題に取り組まなければならない。『三ばの小鳥』では、1番上の男の子は父を探して旅に出ると、ものすごく大きな川に出る。男の子は、手前で魚を捕っているお婆あさんに背中にしてもらい、川のむこうに渡る。2番目の男の子は兄さんを探してあの川の側にきて同じように渡してもらう。3番目の女の子はお婆あさんにお魚がうまくとれますようにという、お婆あさんは大層気を良くして川の向こうに渡してやる。そして、女の子にこれからすることを教えてやる。そこでお婆あさんの教えた通りのことをして、3人で川まで来るとお婆あさんが川の向こうに渡してくれる。『金の毛が、三本あるおに』では、主人公は大きな川のそばに行き、そこにいる渡し守に渡してもらう。川を渡ると、地獄へ行く入り口が見つかる。同様に『怪鳥グライフ』では、主人公が進んでいくと、川にぶつかる。ここでは、渡し舟のかわりに、大男がみんなをむこうにしょっていき、主人公も大男にしょってもらい、むこうに渡る。そして、怪鳥グライフの家につく。

これらの話から、水をはさんだ2つの世界は不連続な世界であることがわかる。川を渡って行くむこうの世界とは、地獄や怪鳥グライフの住むあちらの世界である（ヘンゼルとグレーテルの場合は逆となる）。それを超えてまで行かなければならない主人公の大変さが表現されているし、主人公を渡すための存在、白いかも、お婆あさん、渡し守、大男がいる。

2.4 不思議な力を持つ水

『運のいいハンス』では、主人公は、野原の泉のそばに辿り着き、さわやかな水を飲んで元気をつけようとした。水には、元気を与える力がある。

ここでは、それにつながるイメージとして、癒しの水である命の水の他、不思議な力をもつ水を取り上げる。

『命の水』では、王の病気を治すために三人の王子が命の水を探しに行く。上二人の兄は小人の質問に答えなかったために呪いをかけられる。末の王子は小人の質問に丁寧に答えたため、小人は命の水のある場所を教える。それは呪いのかけられた城の中庭にある泉から湧き出ている。小人に教えられた通りにして末の王子は命の水を手に入れる。しかし、兄たちの策略で、命の水がすり替えられ、兄たちが命の水を探してきたことになる。王はそれを飲むと、たちまち病気が消えてなくなったような気持ちになり、若いころのようにたっしやに、たくましくなる。『金の山の王さま』では、救いにきた主人公が、試練を乗り越えた後、姫は命の水を持ってきて、首を切り落とされた主人公を生き返らせる。『何もこわがらない王子』では、忠実なライオンは、目が見えなくなった王子の顔に、きれいな小川の水を、前脚でかける。水のしずくが2つ3つ王子の目玉の穴を濡らすと、王子はまたいくらか見えるようになる。次に、王子は川に身体をかが

め、川の中で顔を洗うと、彼の目は元よりも明るくきれいになった。その後、呪いのかかった城で、王子は悪魔に痛めつけられるが、黒い乙女が命の水の入っている小さい瓶をもってきて王子を洗うと傷は癒える。『名づけ親さん』では、名づけ親を頼んだよその人から水の入っている杯をもらった。「その水は、不思議な水で、病人を丈夫にすることができる。死に神が頭のそばにいたら病人にこの水をやりなさい。すると病人は丈夫になるだろう」と言う。『三ばの小鳥』では、主人公の女の子は、川を渡してくれたおばあさんの言う通りに、城を通り抜けたむこうにある井戸の水を1ばい汲んでくる。最後に牢屋に入れられ、ひどい病気にかかっていた妃を助け出し、井戸の水を飲ませたら、元気が出て病気も治った。命の水としての、生き返らせることができたり、病気やけがを癒すことのできる水である。それは、特別な場所にある泉や井戸であったり、自然の中の小川であったりする。

『手なしむすめ』では、父親はそうと知らず、娘を悪魔に渡す約束をする。悪魔が娘を連れに来る日がくると、娘は身体をきれいに洗い、チョークで身の周りに輪を書いたため、悪魔は娘に近づくことができなかった。悪魔は、娘が身体を洗うことができないよう、水を取り上げるように父に言う。この水は、清めの水であり、それゆえ悪魔が手を出せない。

『兄さんと妹』では、ママ母の魔女が、森の中の泉に、泉の水を飲むものは、虎、狼、鹿になるという呪いをかける。喉の渴いた兄は、我慢できなくなり、泉の水を飲み、鹿になる。水を飲むとある動物になるという呪いの水である。

『あめふらし』では、若者は姫に見つからないようにするためにどこに隠れたらよいか、助けたきつねに知恵を借りる。きつねは若者を連れて泉に連れていき、中に潜ると、市場の小売と動物取引の商人になってきた。若者も水の中に潜らされてナメクジのような小さいあめふらしにかえられた。うまくいったから、急いで泉に行き水の中に潜ってもとの姿を取り戻す。この水は姿を変える水であり、人間が動物の姿になるという意味で、呪いの水につながるが、再び水に潜ると元の姿を取り戻すことができるという点で、変容の水である。

2.5 何かが起きる場としての水

『忠実なヨハネス』では、ヨハネスは城へ行き中庭に入ると、泉のそばに美しい少女がいて2つの金の桶に水を汲んでいた。彼はその少女に話しかけて、王女の元に連れて行ってもらう。ここで登場する泉は、王女と出会うきっかけを作る場となる。『手なしむすめ』では、妃が男の子を生む。そのことを王に知らせる手紙をもった使いの者が途中で小川のほとりで休み眠りこんでしまったところ、悪魔に手紙をすり替えられる。川のそばで、手紙のすり替えという事件が起きる。『いばら姫』では、妃が水を浴びていると、水の中から蛙が陸に這い上がってきて、妃に女の子が生まれることを告げる。水の世界の住人がうれしい知らせを告げに来る。これは妃が水の中にいるということと無関係ではあるまい。『長ぐつをはいた雄ねこ』では、猫の主人は猫の言うとおりに、湖で水浴びをしていると、王の馬車がそこに通りかかる。猫は、伯爵は服を盗まれて水から出られないと王に言うと、王は服を持ってこさせて、伯爵と一緒に馬車に乗せることになる。この水浴びは、猫の機知により、王と主人が出会うきっかけとなる。『たいこたたき』では、主人公が、湖のそばに行くと、岸辺に3枚の白い麻のきれが落ちているのを見つけ、1枚を持って帰る。夜に声がきこえて、その声が、自分はガラスの山に閉じ込められて、毎日水を浴びに湖に来るが、肌着が無ければ帰れないと告げる。主人公は、その声の娘を助けるためにガラスの山に行く。湖が、主人公と主人公が助けることになる娘を結びつける場となる。『がちょう番のむ

すめ』では、嫁入りの道中の姫が、喉が渴いたので、水の流れている所で、身を乗りだして水を飲む。その時、姫を守っていた3つの血のしずくの入っていた小ぎれが胸から落ちて水と一緒に流れていく。それをみていた腰元は自分が花嫁になり、姫を腰元にして花婿の元へ行く。姫の守りが川に流されてしまい、そのために、二人の地位が逆転する。

水のそば、または水の中で、ある出来事が生じ、そこから物語が展開する。それは、良い展開となるものもあるし、悪い展開となるものもあるが、良い悪いを超えた次元で、水は何かが生じる場として存在する。

2.6 その他

ここでは、2.1から2.5までに分類できない水のイメージを取り上げる。

『鉄のハンス』では、漁師が犬を連れて森の中に行くと、犬は深い水たまりにぶつかる。水の中から腕が伸びてきて、犬を捕まえ引っ張り込む。漁師は引き返して男を三人連れてきて、水を汲ませた。水たまりの底には、山男が横たわっていた。城の檻に捕まえられていた山男は王子とともに城を出て、森に辿り着く。翌朝、少年を泉に連れていき、この泉に何も落ちないように気をつけるよう言いつける。少年は言いつけを守ることができず、世間に出ていくことになる。前半の水たまりは、こちらに住む者を水の世界に引っ張り込む異界としての水のイメージであるが、後半の泉は、何か落ちたら穢れてしまう水晶のように透き通った水のイメージである。ここには、少年が泉の水面に映る自分の顔を見つめるという反映のイメージがある。また、『小さいろば』では、ろばの王子は、散歩して泉のそばに行き、中を覗くと、鏡のように明るい水に自分の姿が映っているのが見えた。それで、悲しくなり、広い世間へ出ていく。水の反映に自分の本当の姿を見、内省する。水は時として、自分を映す鏡となり、そこから自分の心を深めていく場となる。

『ふたりの旅職人』では、水の湧かない城の庭の真ん中に人間の背丈ほどの水を吹き上げさせ水晶のように光らせてみせるという難題を王に命じられる。主人公は途方にくれたが、以前助けた馬が助けてくれる。その馬は3度走り回り倒れると、恐ろしい音がして一塊の土が舞い上がり、噴水が馬上の人ぐらい高く吹き上げ、その水は水晶のようにきれいであった。この物語の王の城に水が湧かないとは、中心の大切な部分が潤っていないことを示している。メルヘンはそのことが解決されなければならない大きな問題であることを語っており、潤す水の必要性を述べている。

3. 日本昔話との比較

対象にしたのは、関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山ー日本昔ばなし(I)ー』『桃太郎・舌きり雀・花さか爺ー日本昔ばなし(II)ー』『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎ー日本昔ばなし(III)ー』(岩波書店 1956, 1956, 1957)である。

2.と同様に、昔話の中に現れた水について話の文脈の中で検討した。ここでも、グリムメルヘンで取り上げた水のイメージの順に見ていき、その違い、日本の昔話の特徴について述べたい。グリムメルヘンでは、それに相当する箇所を出きるだけ取り上げ記載したが、ここではいくつかの例を挙げるに留める。

3.1 死とつながる水

川に流されて死ぬ、川に流されてしまうという話は日本にもあり、そこから同様に殺すために

川に投げ込むという話になる。

川に流されて死ぬ話として、『鬼のむこ』では、雨が降り、途中の小川は大水が出て渡れなくなる。娘を嫁にやるという約束で、鬼に川を渡してもらう。姉2人は断ったが、妹は嫁に行くことを承諾する。鬼は迎えに来たが、その日も洪水になった小川を、娘を抱き上げ渡ったが、途中鬼は足を踏み外し、急流に押し流されて深い淵に巻き込まれ死んでしまう。

また、川に流されてしまう話として、『猿の婿どの』では、畑の仕事を手伝う代わりに娘を嫁にやると言ったために、3番目の娘が嫁に行くことになる。娘を迎えに来た猿に、臼と杵と米をかつがせて行くと、大きな谷があり川が流れていた。娘は花をほしいと言って猿を木に登らせたために、枝が折れて、猿は深い谷に落ちてしまう。そして、臼の重みで沈みながら流れていく。

殺すために水の中に投げ込む話として、『鬼のむこ』では、その後、娘は殿様の嫁になることになる。それを知った姉が嫉妬して、泉に妹を突き落として殺してしまい、自分が嫁になります。

このように、グリムメルヘンと同様に死につながるイメージもあるが、日本の場合、水の中に落ちることがそのまま死につながる話は少ない。淵に落ちて水を飲むけれども、何とか這い上がるなど（『牛方と山姥』、『一軒家の婆』）、死なずに助かることが多い。死につなげるものとして、『猿の婿どの』のように臼や、『かちかち山』の落ちた熊を助けるふりをして、逆に突き落とすなどがあるようである。

3.2 異界としての水

水の世界との関わり方はグリムとは違う。グリムに見られたような関わり方はない。たとえば、魚を助けるという話はあるが、異なる展開へ進む。『鯉女房』では、だんなさまが鯉を買い取ったが、川に逃がしてやった。その鯉は人間に姿を変えて、その家で女中として働く。

日本の昔話にあるのは、『たにし長者』にみられるようなこちらの世界の住人によるあちらの世界である水の世界、その世界の住人（竜宮、ねいんや、乙姫）への尊敬である。『鼻たれ小僧』では、貧乏な男が、花を売りにきて、あまると川の中に入れて乙姫さまにあげていた。ある時、大水が出て川が渡れないときに大亀が出てきて、男を乗せて、乙姫さまの御殿へ連れていく。乙姫さまは、花のお礼に、望みをかなえる1人の男の子をくれる。結末は、グリムの『漁夫と、その妻』と同じであるが、川に住む乙姫に花をあげるというこちらからのあちらへ関わりがみられる。『竜宮の猫』では、姉婿は柴薪を竜宮さまにあげようと、海辺に行き、海の中に投げ込む。すると、海の中から若い美しい女が出てきて、竜宮さまが礼を言うので来てくれと言われ、竜宮へ行き、そこで猫をもらう。『浦島太郎』では、魚釣りにいったが、亀ばかりが釣れる。放してやると、舟がやって来て、竜宮の乙姫さまのお迎えだという。『浦島』では釣り針を探しに弟が海を探していると、白髪の老人が現れ、わけを話した弟はその老人の背中に乗り、いつの間にか竜宮の世界へ来ていた。日本の場合、水の世界は異界ではあるけれども、竜宮の神様の住む世界であり、グリムメルヘンの閉じ込められる死の世界ではない。水の世界は、恐怖に満ちたものというより、敬意を表わす存在の住むところのようである。

また、日本の昔話には、何かが川から流れて来るという話があり、異界である水の世界からこちらの世界に何かをもたらされるというイメージがある。グリムメルヘンに見られた、異界である水の世界に、こちらの世界のものを探しに行くという発想と逆である。『桃太郎』では、婆が川に洗濯に行き、上の方から桃が流れてきて食べたら美味い桃だった。また、大きな美味い桃が流れてきたので、それを持って帰って切ろうとすると桃が割れて男の子が生まれた。『桃の子太郎』

では、婆さまが川へ洗い物に行くと、川の上の方からきれいな箱が流れて来た。中には桃が1つ入っていた。『花さか爺』でも、川に行った婆が川から流れてきた桃を拾い上げ、家の土間に置いておいたら、そこには桃でなく犬がいた。

3.3 2つの世界を分かち水、または障害としての水

グリムメルヘンと同様の意味をもつ水が登場する。『桃の子太郎』では、桃太郎が鬼征伐に向かう。鬼ヶ島に行く途中に大きな川がある。『鬼が笑う』では、川向こうの鬼屋敷にさらわれている。鬼の住む所は、川の向こうのあちらの世界である。

3.4 不思議な力を持つ水

『灰坊』では、主人公は妻に食べてならぬと言われていた桑の実を水がほしくて食べてしまい、死んでしまう。妻はしじゅる水（死んだ者を生かす水）を買って、夫を探しに行き、その死体に水を浴びせて、しじゅる水で拭く。すると、夫は生き返る。この水は命の水である。『山梨とり』では、主人公は、沼の主の呑み込まれた兄2人を救い出し、川から流れてきた赤い欠け椀で沼の水を飲ませてやると、2人は元の通り元気になる（ここで2人が元気になったのは、水の力ではなく、異界である水からもたらされた赤い欠け椀の力であるともとらえることができる）。

『若返りの水』では、爺が山へ炭焼きに行き、喉が渴いた。すぐそこの岩の蔭に清水が湧いていた。爺がその水を手ですくってみるといい味がして体中いい気持ちになった。そして、いつの間にか若くなって、立派な若者になった。婆はそれをうらやましがり、水の出るところを教わって出かけた。婆が帰ってこないのので、心配した爺が探しに行くと婆は水を飲みすぎて、赤子になってしまった。この話は、若返る水であるが、生き返ったり、元気になる水と通ずるものである。

『山の神とほうき神』では、夫に追い出された女房と下女は、ある家に泊めてもらう。その家の娘は、大根を取ってきて煮て食べさせてくれる。下女が大根畑に行くと、娘が大根を抜いた後から水が湧き出していた。喉が渴いているのでその水をすくって飲むと立派な酒であった。『だんぶり長者』では、夫婦が山に畠仕事に行き、昼寝で見た夢の通りに、2人で山の陰に行ってみると水が流れていた。良い香りがするので飲んでみると酒であった。2つの話とも、この水を売って金持ちになる。酒を百葉の長とする日本人にとって、命の水に通じる水と考えることができるかもしれない。

その他の水として、『手なし娘』の父に切られた腕の傷口を谷川で洗う清めの水や、『鬼のむこ』で、姉に泉に突き落とされて殺された妹は鰻となり、姉が水を汲もうとするとあばれて水が濁り、殿様が泉のそばにたつと水がきれいに澄むという穢れを映す水がある。

3.5 何かが起きる場としての水

まず、印象深い出来事が生じた話を挙げておきたい。『手なし娘』で、継母の策略で、娘は子どもを負ぶって家を出ていくことになる。娘は流れのあるところで、かがんで水を飲もうとすると、背中の子どもがズルズルと背から抜け落ちそうになる。びっくりして無い手で押さえようとすると、不思議なことに両方の手が生えてずり落ちる子どもをしっかりと抱き留めていた。奇蹟ともいふべきことが、流れる水を飲もうとするときに起きている。

その他に、日々の日常的な行為として、水を飲む、水を浴びるという表現が多く箇所に見られた。話の展開に関わらないものもあるが、水に関わる日常的な行為から物語が展開することも

ある。『手なし娘』では、手紙を運ぶ飛脚が、水を飲み立ち寄ったのが、継母の家で、そこで手紙のすり替えが起きる。そのために娘は家を出なければならなくなる。グリメルヘンに同様の話があるが、すり替えたのは悪魔であり日本と異なるが、その事件が起きた場に水が関わっている。また、『天降り乙女』では、主人公は、山仕事を終えて、いつもより上流にある広い沼で水を浴びようとしたら、美しい着物がかかっていた。その着物の持ち主は水を浴びる天の女であった。日常的な水浴びという行為から、天の女との出会いという非日常の出来事が生じる。展開は異なるが、グリメルヘンの『太鼓たたき』と同様の出会いが、水の場で生じる。

4. おわりに

グリメルヘンと日本昔話の中から、水を取り出し、どのようなイメージが表現されているかを見てきた。これらの水には、昔話が語られた時代のイメージが反映されている。特にグリメルヘンに多く表現された水に溺れるというイメージは、とりもなおさず、当時の水のもつ危険性や恐怖を表すものであろう。その一方で、日本の昔話には異なる水のイメージも表現されている。それは、西洋と日本のこのころのあり方の違いを表現しているとも言える。日本の昔話には、異界である水の世界に対する親和性や敬意が感じられるし、水の世界からの眼差しもやさしい。

また、ここには以前論じたような水のイメージ、すなわち、無意識としての水のイメージが読み取れる。水に溺れる危険性は無意識に溺れる危険性でもある。そのように理解した場合、昔話が、様々な水を提示し、意識が、無意識といかに関わるかについて述べているようにも思われる。水は死に至る危険性のあるものであるが、適切に関わることができれば、癒しの水ともなる。水は時としてすべてを押し流し、無にしてしまうが、水は不思議が生じる場でもある。水の様々な有り様を、昔話に現れる水は、語ってくれる。以前、宇宙的次元として物事をみる水の視点を提示した(千野, 2006)。しかし、ここで見てきた水は、意識の視点から見た水である。宇宙的次元である水の視点とともに、意識の視点(無意識への危険性の配慮とともに、無意識への敬意)を持ちながら、このころに関わる必要があることを昔話は教えてくれる。

引用文献

- 関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山ー日本昔ばなし(Ⅰ)ー』『桃太郎・舌きり雀・花さか爺ー日本昔ばなし(Ⅱ)ー』『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎ー日本昔ばなし(Ⅲ)ー』岩波書店, 1956, 1956, 1957
- 千野美和子「水のイメージについて」『仁愛大学紀要』第4号, 25-35, 2006
- 高橋健二訳『グリム童話全集ⅠⅡⅢ』小学館, 1976